

天門

石川
淳

集英社

天門

一九八六年一月一〇日 第一刷發行
一九八六年一月三〇日 第二刷發行

著者 石川淳

裝幀者 栃折久美子

發行者 堀内末男

發行所 株式會社集英社

東京都千代田區一ツ橋二ノ五ノ一〇

郵便番號 一〇一

東京〇三―三三八一―二八四二（文藝出版部）

電話 東京〇三―三三〇一―六一七一（販賣部）

東京〇三―三三八一―二九六四（製作課）

印刷所 大日本印刷株式會社

定價 一八〇〇圓

©Jun Ishikawa, 1986, Printed in Japan
ISBN 4-08-772549-9 C0093

著者との諒解により検印は廢止いたします。

亂丁・落丁の本が萬一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負擔でお取り替へいたします。

天

門

天門開闔

能爲雌乎

老子第十章

あるきながら枇杷を一つ食つて吐き出すと、たねは道の泥の中に消えた。雨あがりの道にところどころぬかるみがある。東吉はゴム靴をはいた小さい足でそこをびちやびちや踏みわたつた。また枇杷を食ふ。またたねを吐く。たねは三つ四つ五つと地にふつ飛んで、つよい日光の下に、見るそばから芽が出て、花が咲き、實がなつて、たちまち果樹園がひらけたやうであつた。くだもの屋の店で買つて來た枇杷は紙袋の底にまだすこし残つてゐる。こどもはひとりで機嫌がよかつた。さう。東吉はこれを五歳のときとおぼえてゐる。道は崖の上にながながとつづく。途中に、

おひ茂つた雑草にかくれて、崖をおりるほそい道がついてゐて、おりたところに家があつた。家には祖母しかゐない。入口から聲をかけても返事がなかつた。つい奥にはひつてゆくと、佛壇のある部屋に、祖母は……天井からつるした紐に祖母はぶらさがつてゐた。こどもどころにも異常なことを知れた。東吉はわけのわからぬさげびをあげて、祖母の垂れた足に抱きついた。それは紐を引っぱつたことにひとしかつた。あとはごたごた入りみだれておぼえがない。こどもはこどもなりに逆上してゐた。ただならぬけはひに、垣根ごしの隣家のひとが駆けつけてくれた。やがて、いくたりもあつまつて来て、こどもはとりこみの外側に置かれた。すでに、祖母は疊の上に寝かされた。息は絶えてゐた。もし足に抱きついてぶらさがらなかつたとしたら……それは東吉が年をかさねてからおもひあたつたことであつた。

崖下の家から、東吉は近くの父の家に引取られて行つた。父といふものがともかくゐることはゐた。しかし、東吉はその男を父らしくおもつたことはかつてなかつた。日常したしく口をきいたことはなく、ろくに顔を見たことすらない。その男は商賣は辯護士とやら、事務所はほかにあるとか、朝出て夜はかへりがおそい。家の

中の始末はすべて女中まかせであつた。その女中じつはメカケと、後日にわかつた。ところで、母はといへば、東吉はついぞそれ知らなかつた。そもそも母はゐなかつた。ものごころついてこのかた、そばにはいつも祖母がゐた。祖母は父と別居して、東吉をつれて、崖下の家に住んだ。突然その場から引抜かれて、東吉はほとんど見ず知らずの父の家に捨てられたやうであつた。うさんくさい家は疑惑にみちてゐた。

捨てられたのはこれがはじめてではないらしい。來歴をただせば、もともと捨子ではなかつたか。東吉はふつとさうおもつた。やがて小學校に通ふことになつたときには、兩親そろつたおなじ年ごろのたれかれを見るにつけても、この捨子の考は次第につよく身にしみて來て、東吉のころのうちに根をかためた。ひとには語らない内證の考である。いつなにものがどこに捨てたか。もとより消息はあきらかでない。ただ拾つてくれたのはてつきり祖母にちがひない。ほかにたれがゐるか。その祖母がばつたり死なうとは……

祖母はなぜ自殺にまで追ひつめられたか。東吉はそのわけを知らないとはいへな

かつた。原因は自分にある。小さい胸一つにたたんで、くるしいほど身におぼえがある。崖の下の家茶の間に長火鉢があつて、ひきだしにいつも小銭がはひつてゐた。そのゼニをつかんで顔なじみのくだもの屋にもつてゆけば、みかんでもバナナでも、なにかくれるといふことを東吉はおぼえた。ゼニを投げこめば品物が出る。このからくりがおもしろかつた。ゼニがすくなくから分量はいくらでもなく、すぐ食つてしまふ。二三度は祖母に氣づかれずにすんだ。ある日、ひきだしに手を入れたところを祖母に見つかつた。祖母はその手をぎゅつとつかんで、東吉を疊に引き据ゑた。小學校にもあがらないうちから買食のわるい癖がついて、だまつてゼニをもち出すやうでは末おそろしい。さういふふうには、おまへをそだてなかつた。今からそれでは、いづれろくなものにならない。世間に恥をさらさないうちに、おまへを刺し殺して、わたしも死にます。祖母はむかし嫁人のとき持参といふ懷劍を突きつけてまちかに迫つた。東吉はひらあやまりにあやまつた。しかし、ほとぼりがさめると、性こりもなく、また枇杷であつた。これがきめんの一發か。絶望。自殺。しかも、ばちあたりのガキは首くくりの足まで引つぱつた。祖母が最後に紐を

えらんだのはすでに懷劍を使ふだけの氣力をうしなつてゐたせゐだらう。書置はなかつた。ただ懷劍が佛壇の前の經机にびたりと置いてあつた。東吉はおびえた。無言の白刃は蒔繪の鞆の中にうなつて、夢にまで追ひかけて來た。

ぬすみ。コロシ。犯罪は五歳のときの事件であつた。おびえたガキが逃げ出すところは戸外の道のほかにない。そこがまた捨子の出生の地でもあつた。ただこの道はあてになるやつでない。日は暑く、雨は寒く、ぬかるみをわたり、小石を踏み、途中つまづくために起伏があつて、町一つさきに行くにも山坂を越えるにひとしい。こどもの足には長い旅であつた。息がきれてくるしければ嘔吐もする。さういつても、くるしいことばかりもない。もし嘔吐の中に果實のたねがあれば、地べたの泥はたねを吸ひこんで、とたんにふさふさと茂る果樹園のまぼろしが行手にあかるくただよつた。まぼろしの中に、死んだやうではない祖母のほほゑむ顔が見えかくれた。おもへば、祖母の死顔は目にのこつてゐなかつた。

そのときから、ざつと三十年たつ。今、遠矢東吉は驅出しの辯護士である。遠矢は父の苗字であつた。父は東吉が大學を出たところに死んだ。メカケの祝田作子はい

まだにつつがない。メカケには娘が一人ゐる。その友代といふのは東吉よりも十ばかり年下である。父の死後はみなばらになつて、どうやら生活のめどがついたほかに、遺産といふほどのものはなかつた。たしかに東吉の手にのこつたものといへば、かの祖母のかたみ、水心子正秀の懐剣であつた。

二

町のけしきはがらりとかはつた。道はいちめんにコンクリートを張りつめて、雨がふつてもぬかるみにはならない。土といふものは見えないから、枇杷のたねが落ちて、芽を出しさうな隙間はない。果樹園のまぼろしはどこへやら。人間はむらがる。車はひしめく。捨子の捨てどころもない。ここはてくてくあるいて旅をする風土ではなかつた。茂みは根こそぎ、崖はひらべつたく、壓しつぶされた土地の上に、いやにせいの高い建物がならんで、むかしのくだもの屋はスーパー・マーケットと稱して規模をひろげた。あたりの小家は取拂はれて、あとにアパートが立つた。

そのアパートの一室に、東吉が住んでゐる。

東吉は女房をもたない。ひとりぐらしである。辯護士とはいつても、商賣は一向にはやらない。それでも、亡父の舊宅を整理してえた収入がいくぶんはのこつてゐるので、さしあたりはしのげる。捨子に明日の考はない。さきはどうかなるだらう。漠然たる樂觀をもつて、夜はおほむね行きつけの酒場ですごした。今夜はつれがある。スーパー・マーケットの店長高津庄一。これはむかしのくだもの屋のむすこで、をさななじみでもあり、大學は東吉より二年下であつた。

「遠矢さん。ゆうべ、おたくの妹さんの歌を聴きましたよ。」

「ふむ。」

東吉は祝田友代を妹と呼んだためしはなかつた。ひとがさういつたときにはだまつて聞きながす。友代が流行の歌うたひになつたことは知つてゐたが、それにはかかはらずにゐた。

「あなた、聴いてないんですか。」

「さあね。」

「みごとでしたな。歌はいふまでもなく、ボディがですよ。友代さんのね。ゆたかな胸を張つて、なやましく腰を振つて、舞臺せましと、しぶきが立つほど派手でしたな。女の子はきやあきやあさわぐ。わたしもいつしよになつて聲をかけましたよ。」

「ゆたかな胸。」その乳房は東吉がかつて十八歳の友代からうばつたものであつた。友代のはうもしひて抵抗はしなかつた。はじめて吸つた女の乳房の味。東吉は母の乳といふものを知らなかつた。またすでに賣女を買つたことはあるが、胸にはくちびるをふれなかつた。友代の乳首は舌の上にくわつてをのく。それはかの枇杷にかぶりついたときの味に似てゐた。東吉は吐氣がした。そして、しゃぶつてゐるものを吐き出さないうちに、さらにつよく吸つた。盛りあがつた胸のふくらみにびつたり顔を沈めて、血のたぎる肉の丘の上にたちまち果樹園のひらけるのを見た。現在の歡樂のただなかに、過去のまぼろしは死なない。東吉は一瞬こどもにかへつた。その丘は小さい旅人が足を休めるところであつた。今、友代はどこに。ちかごろしばらく逢はない。突然、あまい乳房のにほひがむつと鼻を打つた。

「どうしたんです。遠矢さん。ぼんやりして。」

東吉は水割のグラスをあふつて、

「いや。おもひ出したよ、友代のことを。あいつはこどものときから歌がすきだつたが、どうやらその道で立つことになつたか。」

「いさましく立つてますよ。このところ、人氣が出て來ましたね。」

「さきはどうなるか知れなくても、今がよければまあいいさ。おれの辯護士よりましのやうだ。」

「それは仕事がちがひますよ。仕事の筋がね。あなただつてチャンスがあれば賣出せるでせうに。」

「そのチャンスといふものに、おれは縁がないらしい。」

高津はティブルをとんとたたいた。

「そんなことはない。事のきつかけはどこにでもありますよ。たとへば、このわたしにしても、おやぢがくだもの屋の店の増築といふ考を出したとたんに、これを面目一新してスーパー・マーケットに仕上げて見せようといふ著想がうかびましたね。」

まあわたしなりの苦心はありました。マーケットができあがつてしまふと、おやぢは勝手がちがつて毫碌したやうですが、わたしは張切つてね。これでも一人前の店長としてやりがひはあると、いはせてもらひませう。おたくだつて……」

女のゐないこの小さい酒場では、はなしのじやまをするものはなかつた。

「おたくだつて、なくなつたお父上が辯護士さんだつたから、すらすらとおなじ道にすべりこんで……」

「ちがふ。ちがふよ、それは。」

東吉は手をあげてさへぎつた。

「なにがちがふんです。」

「全然すらすらぢやなかつた。おれにしても、生きてゐるかぎり、いやでもなにものかであるはずだらう。今までにも、もし欲すれば、なにものになるか、撰ぶチャンスは何度かあつた。それがいかなるチャンスも見おくつて、手をつかねたまま、氣がついてみると、いつのまにか辯護士といふものになつてゐたやうなわけだ。なんのゆかりもないおやぢの跡を繼いだかたちでね。辯護士の家にそだてられたから、